

## 1. はじめに

今回は、立命館大学大学院応用人間科学研究科教授 高垣忠一郎先生著の「生きることと自己肯定感」を読んで私が学んだ事を記載します、

## 2. 私が学んだ内容

こどもの問題として次のように考える人がある。「今日のこどもは少子化のなかで、小さい時から王子様のように扱われ、何でも思い通りにできていると思っている。だから、ちょっとでも思い通りにならなかったら切れてしまう」。こういう見方では今のこどもたちの示す諸現象を裁断することに賛成できない。たしかに、親や祖父母に何から何までかまわれて育てているこどももいるが、それは親や祖父母の期待にこたえる「よい子」であることと引き換えに大事されているのであり、無条件に大事にされているのではない。今のこどもの問題は、「よい子でないと見捨てろ」という「親の脅し」の教育や子育ての中で、見捨てられ自分の無価値観や自己否定感にうちひしがれていたり、「見捨てられる不安」におびえ、自由にありのままの自分を表現したり主張したりできず、我慢をしているこどもが圧倒的に多い。些細なことで「切れる」とうことの原因や理由を、「耐性がなく衝動的で未熟な人格」だからと即断することは、それこそ短絡的で「切れた」見方である。そういう大人の態度が、子どもを「切れる」ところまで追い込んでいくのではないだろうか。こどもの生きている状況に身を置いて、こどもの示す姿を理解しようとすれば、些細なことで「切れる」こどもの現象をみたときに、まずなにを考えるか。もし自分だったら、そういう些細なことで我慢できずに「切れてしまう」ことがあるとすれば、それはどういふときか、どういふ状況かと考える。つまり相手の立場に身を置いて自分の心に問いかけてみる。そうすれば「よほど虫の居場所が悪かったからだろうか」とか、「よほど不満がたまっていたのだろうか」とか、「よほど我慢してきたからか」などと色々と考えられる。髪をトサカのように立て、眉毛をそり落としたこどもを前にしたとき、「もし自分がああゆう格好で校門をくぐるとすれば、それはどういう心境からなのだろうか」と想像をフルに使って考えてみる。そうすれば、それが相手を威嚇する外面の印象とは裏腹に、自分の弱った心を守る「鎧」であることに思いが至るかもしれない。そういう発想や視点で、こどもの生い立ちや家庭環境、学校で置かれている状況を考えたり見たりするならば、こどもが甘やかされて育っているから「自己中心的」で「耐性が育っていない」などと簡単に決めつけることができないことがわかる。

こどもを「ここはよいが、ここはダメ」と評価し、課題を与えて動かすことばかりに関心が狭まっていると、こどもを容体として見ることばかりが先行する。いろんな気持ちや思いを持って生きている主体としてのこどもを見失ってしまう。そうするとこどもの立場に身を置いて、こどもの生きる状況をとらえたり、こどもの気持ちや思いを共感的に理解することができない。日頃見せるこどもの姿を「普通」と評価するにとどまり、その子がどんなしんどさやつらさを背負って生きているか、その内面にまで思いが至らなかったら、その目には「普通」のこどもが突然「切れる」と映るだろう。子ども同士の人間関係、とりわけ学校での人間関係は「他人と共にありながら、安心して自分自身でいられる」関係でなくなっている。つらくても、しんどくても周りに合わせて、明るく振る舞わないといけない。暗い様子をしていると、嫌われ仲間はずれにされかねない。苦しみは一人ひとりの心の奥にしまい込まれ、抑圧されてしまう。表面は「明るく、元気」に周囲に合わせながら、その実一人ひとりが心に苦しみを溜め込んで孤立しているという状況が広がっている。子どもが「おなかが痛い」と訴えたときに、「よし、よし」とおなかをさすってやる、「手当てする」関係が失われているのではないか。それはおなかに手を当てているけれど、実は心にも手を当てているのだ。ある登校拒否のこどもの父親は、脚をもんでほしいという息子の脚を「これは心をもみほぐしているのだ」と思って、もんでやったそう。